2021年度

SA

小　論　文

3月12日(金)
【後 期 日 程】

人文社会科学部　(社会学科)

10：00～11：30

注　意　事　項

試験開始前

1　監督者の指示があるまで，問題冊子，解答用紙，下書き用紙に手を触れてはいけません。

2　監督者の指示に従って，全部の解答用紙(３枚)に受験番号を記入しなさい。

試験開始後

3　この問題冊子は，５ページあります。はじめに，問題冊子，解答用紙，下書き用紙(１枚(表裏))を確かめ，枚数の不足や，印刷の不鮮明なもの，ページの落丁・乱丁があった場合は，手をあげて監督者に申し出なさい。

4　解答は，すべて解答用紙に記入しなさい。(下書き用紙と間違わないよう十分注意してください。下書き用紙は採点対象となりません。)

5　問題は，声を出して読んではいけません。

6　配点は，比率(%)で表示してあります。

試験終了後

7　問題冊子と下書き用紙は，必ず持ち帰りなさい。

『注意事項』

1．書き出しは，一マスあけない。

2．改行したら，一番上の一マスをあける。

3．読点には「，」を使用し，句点には「。」を使用し、それぞれ一マスとする。ただし，行の末尾については文字と同じ一マスに含める。

4．小さな文字「っ」「ゃ」「ゅ」「ょ」は一マスで使う。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

事前説明

次の文章は、岡檀『生き心地の良い町～この自殺率の低さには理由(わけ)がある～』からの抜粋です。著者は自殺率と地域特性には関係があると考え、全国的にもとりわけ自殺率が低い徳島県・海部町に注目しました。「自殺希少地域である海部町のコミュニティにあって自殺多発地域にはない要素、もしくは海部町には強くあらわれているが自殺多発地域では微弱な要素――、それらがすなわち『自殺予防因子』である」という仮説をもって調査を行い、その「因子」を見出していきます。

以下、本文より抜粋

〈病、市に出せ〉

海部町での定宿である旅館のご主人から初めてこの言葉を聞いたとき、私のアンテナがふるふると揺れた。

（中略）

彼の説明によれば、「病」とは、たんなる病気のみならず、家庭内のトラブルや事業の不振、生きていく上でのあらゆる問題を意味している。そして「市」というのはマーケット、公開の場を指す。体調がおかしいと思ったらとにかく早目に開示せよ、そうすれば、この薬が効くだの、あの医者が良いだのと、周囲がなにかしら対処法を教えてくれる。まずはそのような意味合いだという。

同時にこの言葉には、やせ我慢すること、虚勢を張ることへの戒めがこめられている。悩みやトラブルを隠して耐えるよりも、思いきってさらけ出せば、妙案を授けてくれる者がいるかもしれないし、援助の手が差し伸べられるかもしれない。だから、取り返しのつかない事態にいたる前に周囲に相談せよ、という教えなのである。

「病、市に出せと、昔から言うてな。やせ我慢はええことがひとつもない」。彼の母親の口癖であったという。「たとえば借財したかて、最初のうちはなんとかなるやろと思て、黙っとりますわな。しかし、どんどん膨れ上がってくる。誰かが気づいたときには法外なことになっていて、助けてやりとうてもどないもできん、ということになりかねん。本人もつらいし、周囲も迷惑する」。

「じゃあこの格言は、リスクマネジメントの発想なんですね」私が言うと、「ほのとおり」。彼は力強く同意した。

またひとつ、パズルの一片を手に入れた気がした。

それからというもの、私は海部町民に会うたびに、この格言を知っているかと尋ねて回った。知っている、あるいは聞いたことがあるという海部町民はせいぜい昭和一桁生まれの世代までで、それ以上若くなると知らないという。しかし世代の異なる町民であっても、その言葉のもつニュアンス自体はよく理解できるということだった。

似たような言葉を聞いたことがありますかという私の質問に対し、ある四十代の女性が、「でけんことはでけんと、早う言いなさい。はたに迷惑かかるから」と、子どものころから親や教師によく言われたと教えてくれた。先の古い格言と、彼女が引用したこの諭しは、確かに同じコンセプトを持っている。彼女が即座にこの言葉を選び出したことに、私は感心した。長きにわたり、これらの教えが地域住民に正しく継承され、共有されているあらわれだろうと解釈した。

どの町にも助け合いはある

「助け合い」を少し堅苦しく言うと「相互扶助」、社会学では「社会的支援」「ソーシャル・サポート」などの用語を用いることもある。先行研究によれば、これらは自殺の危険を緩和する要素として挙げられることが多い。そして、自殺希少地域である海部町も自殺多発地域であるA町も、フィールドにおいて観察する限り、どちらにも助け合いの精神は深く根付いており、日常生活によく組みこまれている。両地域ともに、関係者や住民たち自身もその点を強調する。

しかし私は、ちょっと待てよ、という気持ちになる。

海部町にもA町にも等しく助け合いの精神があるとすれば、先行研究が指摘する、「人々の助け合いが根づく環境が自殺の危険を緩和する」という主張は矛盾する。自殺多発地域A町においては、助け合い――相互扶助が自殺を抑止しえていないということになる。本当にそうなのだろうか。

そこで次に考えたのが、一般に人々が「助け合い」と言い習わしている言葉にも、その本質や住民意識に、地域によって差異があるのではないかということだった。

まず海部町とA町に共通する「助け合い」は、ある種のシステム(機構、社会体制)を成している。農業や漁業など生業に関する連携、地域の保安、家の修繕や冠婚葬祭などに関する支援についてそれぞれに決まりごとがあり、長年にわたり継承されてきた。そのシステムに構成員として所属している限り、住

民は安心して暮らしていくことができる。ただし、通常これら助け合いシステムの対象となるのは、あくまでコミュニティ全体の利害にかかわる事柄であって、純粋に私的な問題となると援助の手引きが定められているわけではない。

助け合いに関する二町間の相違点は、この個別私的な問題に関する援助である。海部町の「病、市に出せ」という格言に象徴されるように、この町では個々人が私的な悩みを開示しやすい環境づくりを心がけてきた痕跡が見られる。他方、A町では助け合いという行為自体を尊ぶ気持ちが強く、いざとなればコミュニティからの支援があることに安心を覚えつつも、自分の個人的な悩みを誰かに相談することについてはより強い抵抗を感じている様子が窺える。

（中略）

こうした二つの町の住民気質の差異を確かめたいと思い、アンケート調査(注一)に加えたのが以下の質問項目である。「あなたは悩みやストレスを抱えたときに、誰かに相談したり助けを求めたりすることを恥ずかしいと思いますか？」

これに対し否定の回答、つまり「助けを求めることを恥ずかしいと思わない」と回答した人の比率は、海部町で六十二・八パーセント、自殺多発地域であるA町で四十七・三パーセントであり、海部町では援助を求める行為への心理的抵抗がより小さいことが示されている(表1・文末注にあり)。

（中略）

ではここで、これまで述べた海部町コミュニティの特性について理解を深めるために、町の成り立ちと歴史について触れたいと思う。

江戸時代の初期、海部町は材木の集積地として飛躍的に隆盛した。一説によれば、豊臣家が滅ぼされた大坂夏の陣のあと、焼き払われた城や家々の復興に充てる大量の材木の需要があり、近畿からの買い付けが阿波の海部町にまで及んだという。

近隣町村はいずれも豊かな山林を有しているのだが、海部町には山林という資源に加えて、山上からふもとまで丸太を運搬するための大きな河川があり、さらには大型の船が着岸できるだけの築港が整備されているという、理想的な地の利があった。短期間に大勢の働き手が必要となった海部町には、一攫千金を狙っての労働者や職人、商人などが流れこみ、やがて居を定めていく。この町の成り立ちが、周辺の農村型コミュニティと大きく異なる様相を作り上げていったことに関係している。海部町は多くの移住者によって発展してきた、いわば地縁血縁の薄いコミュニティだったのである。

（中略）

町の黎明期には身内もよそ者もない。異質なものをそのつど排除していたのではコミュニティは成立しなかったわけだし、移住者たちは皆一斉にゼロからのスタートを切るわけであるから、出自や家柄がどうのと言ってみたところで取り合ってももらえなかっただろう。その人の問題解決能力や人柄など、本質を見極め評価してつきあうという態度を身につけたのも、この町の成り立ちが大いに関係していると思われる。そして、人の出入りの多い土地柄で

あったことから、人間関係が膠着することなくゆるやかな絆が常態化したと想像できるのである。

長い歴史をもつ地方の町村では、隣人とのつながりが強く相互扶助の精神が深く根づいているとする一面的な見方が多い。しかし、自殺希少地域である海部町のコミュニティでは、自殺多発地域に比べはるかにゆるい絆を有しているという新たな知見が、自殺予防を考えていく上での重要なヒントになると考えている。

（岡檀『生き心地の良い町～この自殺率の低さには理由（わけ）がある～』講談社二〇一三刊より　一部改変）

（注一）　著者は海部町でのインタビューや観察のほか、海部町および同県内の自殺多発地域であるA町を含む九町村の住民（二十歳以上三一〇〇名程度）を対象にアンケート調査も行っている。本書に含められた表はその調査結果のうち、とくに海部町とA町を比較したものである。

左の表1、2、3、4はいずれもこのアンケート調査の結果であり（数値は%）、引用した文中で述べられている事柄の根拠となっている（なお、海部町とA町との値の差は統計的にも有意であることが確かめられている）。

表1　援助希求への抵抗感

		肯定	⇒	否定
悩みを抱えたとき、誰かに相談したり助けを求めたりすることに抵抗がある	海部町	20.2	17.0	62.8
	A町	27.0	25.7	47.3

表2　排他的傾向の度合い

		肯定	⇒	否定
ほとんどの人は信用できる	海部町	35.1	31.1	33.8
	A町	18.9	49.8	31.3
相手が見知らぬ人であっても、ほとんどの人は信用できる	海部町	27.6	28.3	44.1
	A町	12.8	42.8	44.4

表3　地域リーダーを選ぶ際の基準

		肯定	⇒	否定
問題解決能力を重視	海部町	76.7	17.9	5.3
	A町	67.3	23.6	9.2
学歴を重視	海部町	6.8	24.6	68.6
	A町	13.3	17.6	69.1

表4　隣人とのつきあい方

	日常的に生活面で協力	立ち話程度のつきあい	あいさつ程度の最小限のつきあい	つきあいはまったくしていない
海部町	16.5	49.9	31.3	2.4
A町	44.0	37.4	15.9	2.6

問一　（配点　三〇％）

(1)　著者は、自殺予防には「絆」「人とのつながり」こそが重要だというそれまでの通説を見直すことになりましたが、その必要性になぜ気がついたのか、一〇〇字以内で書きなさい。

(2)　また、その見直された結果、どのような知見が得られたのか、一五〇字以内で書きなさい。

問二　（配点　七〇％）

(1)　著者は「自殺(率)」に着目して「生き心地の良い町」の特性を探求しました。それでは、あなたの関心に従って「生き心地の良い町」のあり方を検討するとすれば、まずどのような問いを立てますか。その問いの理由や意義とともに三〇〇字以内で説明しなさい。

(2)　次に、その問いを探求するためには、どのように調べていくことが適切であるのか、考えうる工夫や注意すべき点とともに三〇〇字以内で説明しなさい。